

ブロッコリー育苗改善による産地の活性化

■ 綾坂地区ブロッコリー生産者 ■

※協力機関：県農業試験場、病害虫防除所、県農業経営課、JA香川県

(中讃農業改良普及センター 黒川幸重、○上原啓介)

●対象の概要

坂出市、綾川町及び宇多津町(綾坂地区)でのブロッコリーは、近年、栽培面積が年々増加している(図-1)。平成28年産では、209名により283ha栽培がされている。

当地区を管轄するJAは、JA綾坂地区営農センターであり、生産者部会は綾歌南部と府中、坂出園芸の3つの組織がある。

綾坂地区におけるブロッコリーの育苗は、綾川町にあるJA綾歌広域育苗センターに集約されており、栽培面積の97%のブロッコリー苗が生産者へ配給されている。

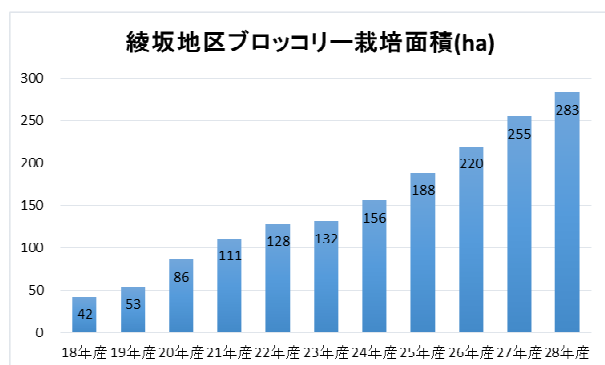


図-1 綾坂地区ブロッコリー栽培面積の推移

●課題を取り上げた理由

平成26年産秋冬作において、ピシウム菌が原因による立枯病が多発した。植え直しても同様に枯れていく場合が多かったため、出荷期間前半の収穫量に大きなダメージを負った。

この原因を解明し、今後の対策をとる必要があると生産者の声が多く寄せられた。

また、ブロッコリーの栽培が年々増加する中、育苗場所が手狭になってきたため、将来の育苗スペース確保に向けた対策が必要であった。

そこで、関係機関と連携し、調査、検討会、対策を行っていった。

●普及活動の経過

1 苗立枯病の原因究明

平成26年に苗立枯病の発生が多かった生産者を対象に、発生状況の聞き取り調査を実施した。その結果、9月15日~25日渡しの苗に発生が多く、植え直しても同様に枯れていく苗や、育苗段階での発生も見られたことがわかった。

被害のあった株を病害虫防除所に持ち込んで検鏡した結果、ピシウム菌が検出される場合が多かった。

2 関係機関との連携による課題化

平成26年11月から、普及センターとJA綾坂地区営農センターが中心となり、関係機関(農業試験場、病害虫防除所、農業経営課、JA香川県)の協力を得て、育苗改善に向けた検討を開始した。



課題解決に向けた検討会

この中で、育苗センターにおける灌水と育苗トレイ洗浄・消毒に問題があるのではないかと疑われた。

灌水は、ムラができないように十分に掛けるため、過湿の傾向にあった。育苗トレイは数年間繰り返し使用しており、前年に使用したトレイを返却してもらい、塩素を混入した地下水で洗浄後、塩化ベンゼンルコニウムを混入した地下水で消毒していた。この剤は食品の細菌消毒用であり、植物病原菌への効果は不明であったため、次亜塩素酸ナトリウムでの消毒にすべきとの結論になっ

た。

育苗スペースの問題については、栽培面積の増加に加え、品種数も多くなっており、「苗渡し日×品種数」の区分ごとに予備苗15%程度を立てることによるロスが大きくなっており、苗渡し日と品種数を減らす必要があるという結論になった。

3 課題解決に向けた取組み

育苗中の病害虫の発生状況の把握と迅速な対応を行うため、病害虫防除所と連携して、定期的に発生調査と防除指導を行った。

また、育苗技術の改善点としては、①育苗トレイの次亜塩素酸ナトリウム消毒後に水洗浄、②育苗培土の施肥量減肥、③播種直後の灌水圧の改良、④灌水ノズルの改良、⑤灌水方法の改良、⑥育苗期の病害虫防除暦の見直し、⑦追肥時期・回数の見直し、⑧循環扇の向きの改良、⑨育苗期間の見直し等を行った。

品種数を減らす取組みでは、以前は3部会が各自で決めていた品種を、綾坂地区全体を対象にした担当者会、役員会で検討することにより、過去の展示成績等から品種数の絞り込みを行った。

4 関係機関の連携、情報の共有化

秋冬作と春作が始まる前の年2回、関係機関が育苗センターに集まり、昨年度の課題と対策、その結果、および今年産の対策について協議を行い、情報の共有化と今後の対策について検討を行った。普及センターはその取りまとめと改善に向けた提案を行った。

●普及活動の成果

1 苗立枯病の発生軽減

次亜塩素酸ナトリウムによる育苗トレイ消毒は、当初は処理枚数が多く、日陰干しが十分でなかったこと等により子葉が黄化する等の塩素障害が見られた。その後、消毒後の水洗浄を追加することによりこの問題は解決し、育苗期間での苗立枯病の発生はほぼ見られなくなった。

2 苗質の改善

育苗技術に関する改善を行った結果、苗立枯病の発生のみならず、子葉の黄化・落下や、苗の徒長抑制、苗由来の病虫害の発生減など、本圃における病害の発生も少なくなったため、生産者の育苗に対する評価が高まってきた。

3 病害虫の発生状況調査と情報の共有化

2週間おきの病害虫発生状況調査により、発生

初期の病害虫の確認と症状の見分け方の共有化が行え、育苗センター職員の技術力向上に繋がった。

4 品種数絞り込みによる育苗の効率化と育苗スペースの確保

秋冬作の品種数は、平成27年産の23品種（試験品種を含む）から平成28年産は17品種に集約した。苗渡し日も、各部会で異なっていたものを5日おきに統一したことにより、「苗渡し日×品種数」の組み合わせが少なくなり、ロス（予備苗の量）が大幅に減少し、栽培面積の増加に伴う育苗スペースの拡大抑制に貢献した。



健苗育成に向けて関係機関と状況確認

●今後の普及活動の課題

綾坂地区のブロッコリーは栽培面積が年々増加し、平成28年産で283haとなった。JA綾歌広域育苗センターでは、秋冬作で4万枚、春作2万5千枚の育苗を行ったが、秋冬作で別途5千枚分はJAの他の育苗センターや県外の種苗会社へ外部委託して育苗スペースを確保している現状である。

県内のブロッコリー栽培面積も年々増加しており、今後の増加分に対応した広域的な対策が求められる。

今後とも、ブロッコリーの安定生産に向け、品種の選定や、健全な苗を生産者に供給するための育苗技術の改善を、関係機関と連携して続けていく必要がある。